



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	障害のある子どもに対するキリスト教保育における子ども理解：キリスト教保育実践園でのインタビューを通しての考察
Author(s)	吉川, 和幸; Yoshikawa, Kazuyuki
Citation	子ども発達臨床研究, 18, 15-23
Issue Date	2023-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.18.15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90590
Type	departmental bulletin paper
File Information	050-1882-1707-18.pdf



障害のある子どもに対するキリスト教保育における子ども理解

ーキリスト教保育実践園でのインタビューを通しての考察ー

吉 川 和 幸*

Understanding Children with Disabilities in Early Childhood Education and Care based on Christian Faith: Reflections through Interviews with Preschools Practicing ECEC Based on Christian Faith

Kazuyuki YOSHIKAWA

【目次】

- I. 問題及び目的
- II. 方法
 - 1. インタビューの対象者
 - 2. インタビューの内容
 - 3. 本研究における倫理的配慮
- III. 結果及び考察
 - 1. 「弱く小さくされた人たちに心を寄せる」ということ
 - 2. 「人間の尊さを共に生きる」ということ
 - 3. 「人は造られたもの（被造物）である」ということ
 - 4. 子どもを「受けとめる」ということ
- IV. 総合考察

I. 問題及び目的

保育所、認定こども園、幼稚園等で行われる保育^{注1}は、実践者である保育者^{注2}と、子どもの閉じた世界で構成されるものではない。それは、実践の場がもつ文化、そして一人ひとりの保育者がキャリアを通して獲得してきた子ども観、保育観など、様々な思想や理念が実践と響き合いながら、弁証法的に象られていくものであると考える。

本研究では、障害のある子どもを含め、多様な子どもが在ることを前提としたインクルーシブな

保育^{注3}における、実践者のキリスト教信仰に着目した。戦前から戦後にかけての障害児・者福祉を先導した著名な実践者の多く^{注4}が、キリスト教信仰者であったことは広く知られている。

キリスト教信仰に基づいた保育、すなわちキリスト教保育^{注5}とは、「子ども一人ひとりが神によっていのちを与えられた者として、イエス・キリストを通して示される神の愛と恵みのもとで育てられ、今の時を喜びと感謝をもって生き、そのことによって生涯にわたる生き方の基礎を培い、共

* 国立特別支援教育総合研究所・総括研究員

に生きる社会と世界をつくる自律的な人間として育つために、保育者がイエス・キリストとの交わりに支えられて共に行う意図的、継続的、反省的な働きである」と示されている(キリスト教保育連盟, 2010)。小見(2021)は、「キリスト教保育は、キリスト教の信仰や聖書に表された考え方(神学的概念)に共感し、その子ども理解に沿って乳幼児を養い育てようとする働きの総称といえることができる」と述べている。

1880(明治13)年4月に、日本で最初の私立幼稚園でもある桜井女学校附属幼稚園が開設されて以来(小林, 1986a)、キリスト教保育は既に140年以上の歴史を積み重ねている。

障害のある子どもに対する、キリスト教保育における実践は、管見の限り、戦前の実践に関する記録は少ないが、1895(明治28)年に、神戸のバプテスト教会に設立された善隣幼稚園において、1911(明治44)年から開始された午前・午後の二部制保育の午後保育において、目の病気のある子どもを受け入れていたことが報告されている(小林, 1986b)^{注5}。

戦後、障害のある子どもを対象とした保育制度^{注6}が、1974(昭和49)年に策定されて以後、保育所、幼稚園における、障害のある子どもの受け入れが進められていく。当時、障害のある子どもが在籍した保育所、幼稚園の割合は、1980(昭和55)年時点で、保育所について7.6%、幼稚園については35%であったが(柴崎, 1997)、キリスト教保育実践園に特化すると、1981(昭和56)年の調査で、67.7%である(南沢, 1983)。このことから、キリスト教保育実践園の多くが、障害のある子どもを、早期から受け入れていたことが推察される。

キリスト教保育を実践している幼稚園を対象に調査を行った浅見(2004)は、キリスト教保育の特色として、保育者からの回答が最も多かった項目は「個性重視」と「共に生きる」であったことを示している。「共に生きる」とは、我が国における、特別支援教育の推進、そして、インクルーシブ教育システム構築の先に目指されている「共生社会」(文部科学省, 2012)^{注7}にも重なる言葉で

あるが、そこには共通性があるのだろうか。障害のある子ども、定型発達の子どもの、そして保育者が、保育の場で共に生きる過程を通して、インクルーシブな保育が創出されていく。その過程における、障害のある子どもに対する保育者の子ども理解とはどのようなものであるか。

本研究では、その問いに迫るために、キリスト教保育を実践している幼稚園、幼保連携型認定こども園の管理職である保育者へのインタビューを行った。そして、インタビューでの語りから、キリスト教保育における、障害のある子どもに対する子ども理解について考察し、多様な子どもが在ることを前提としたインクルーシブな保育への示唆を得ることを目的とした。

II. 方法

1. インタビューの対象者

キリスト教保育を実践している、私立A幼稚園の理事長であるA氏と、私立幼保連携型認定こども園Bこども園の園長であるB氏に、インタビューを実施した^{注8}。A氏はA幼稚園で25年間、B氏はBこども園の前身の幼稚園を含め18年間、園長として勤務しており、共にキリスト教の信仰者である。

A幼稚園、Bこども園ともに、障害のある子ども、定型発達の子どもの分け隔てることなく長年受け入れてきた歴史があり、敷地内もしくは隣接してプロテスタント系の教会が設置されている環境にある。また、A幼稚園については、過去に筆者の子どもが通園しており、A幼稚園の保育について、保護者として理解している背景があった。

2. インタビューの内容

A氏に対するインタビューを201X年8月、B氏に対するインタビューを201X+2年11月に実施した。A氏、B氏ともに、それぞれの園における保育理念と、障害のある子どもへの保育に関する考えを中心に、半構造化インタビューによる聞き取りを行った。また、B氏へのインタビューでは、A氏のインタビューでの語りの一部を引用しながら

聞き取りを進めた。

A 氏へのインタビューの所要時間は 117 分、B 氏へのインタビューの所要時間は 46 分であった。インタビューの内容は、了解を得て、IC レコーダーに録音し、終了後、速やかに逐語録を作成した。

3. 本研究における倫理的配慮

インタビュー協力依頼の際に、筆者から、本研究の内容について書面、口頭での説明を行った。また、逐語録を基にした資料作成の際に、個人情報保護に留意するとともに、本論文の原稿を A 氏、B 氏が確認した上で、公表に関する承諾を書面により得た。

Ⅲ. 結果及び考察

以下、A 氏、B 氏へのインタビューの逐語録を基に、本研究の目的に沿って、キリスト教保育における子ども理解を表していると思われる語りを抜粋し(語りの部分の傍線は筆者による)、考察する。

1. 「弱く小さくされた人たちに心を寄せる」ということ

A 幼稚園では、A 氏が園長に就任する以前から、重度の障害のある子どもを受け入れてきた。以下は、A 幼稚園が、障害のある子どもを長く受け入れてきたことに関連する A 氏の語りである。

A 氏：キリスト教で大事な考え方があるのですが、それは、弱く小さくされた人たちに心を寄せていくってことなのですね。弱く小さくされた人たちに心を寄せていくという、これが根本的になりますよね。生前のイエスの歩みがまさにそうだったのですね。

筆者：弱く小さくされた人たちというのは、子どものことですか？ それとも障害のある人？

A 氏：障害も含めて、とにかくいろんな意味で社会からはじき出された、あるいは社会から

白い目で見られる、そういうふうな人たちに心を寄せていくっていう。これは子どもたちに対する我々の思いもそうだし、子どもたちにもその思いを共有していったほしい。

だから、困っているお友達がいたら援助の手を差し伸べる。障害をもっている子どもに対しては、やはり、それをきちっと受けとめて、同じ目線で一緒に歩むことを、これを学んでもらいたいというのを子どもたちに求めることでもあるし、私たちが当然子どもたちを見る上でも、そういう目で見ていかなきゃいけないということですよ。

だから、障害をもっている人が訪ねてきて、私たちは一度も断ったことはありません。今まで。それは私が園長になる前から貫かれていたことですね。

A 氏の語りの中の「弱く小さくされた人たち」とは、定型発達の子どもの視点からは、障害のある子ども、また、保育者の視点からは、障害の有無を問わず子ども全てを指すと思われるが、「心を寄せていく」とは、自分より弱い相手に対して、憐愍の思いを向けるということではない。A 氏は、併せて「同じ目線で一緒に歩むこと」と語っている^{注9}。ここで A 氏が述べている「心を寄せていく」とは、自分とは異なる者を排斥することなく尊重し、共に生活することを、共に追求しようとする姿勢ではないか。そのような姿勢は、子どもに求めるだけではなく、障害のある子どもを含む、多様な子どもを受け入れる園の姿勢として、保育者にも求められている。

A 氏のこのような姿勢に対して、B 氏からは以下の内容が語られた。

筆者：以前、別のキリスト教の幼稚園の先生から教えていただいたこと^{注10}なのですが、キリスト、イエス様の生きる姿勢として、小さく生まれた人たちを大切にすると仰っていました。そういうキリストの姿勢を見習わなければ

ばならないということを仰っていました。

B氏：それもあると思います。私たちも、弱い者と共に生きるというか、キリストが虐げられた人たちと一緒にいたり、嫌われている人たちと一緒にいたりしてくださったのと同じように、誰からも顧みられないような人とか、そういう誰とでも、というか、どの人とも共にいたいなという気持ちは、やはりあると思います。でも、それができているかどうか分からないけど。でも、そういう姿勢というのは共感できます。言われていることは分かります。

「そういう姿勢というのは共感できます」、B氏は、A氏の姿勢に共感できると語っている。加えて、「どの人とも共にいたいなという気持ちは、やはりあると思います」(傍点は筆者による)と語っている。「共にいたい」とは、傍にいる対象が弱いから、もしくは障害があるから、その傍にいないといけないということではない。人が多様な属性や特性によって、分け隔てられるのではなく、人という存在として共に在ることを、自らの在り方として追求するということである。

そして、B氏は、人という存在を「尊さ」という言葉を用いて説明している。以下、B氏の語りを取り上げて考察していく。

2. 「人間の尊さを共に生きる」ということ

Bこども園では、保育の理念、目的として「人間の尊さを共に生きる」ことを挙げている^{註11}。以下は、Bこども園の保育の理念に関するB氏の語りである。

B氏：やはり、キリスト教の保育観というか、それはやはり、人間一人ひとり、みんな愛されて生まれてきているのだということが第一だと思うのです。弱い人も助けが必要な人も、みんな同じく尊い人だっていうことです。Bこども園の保育の理念というのは、「人間の尊さを共に生きる」ということ。違いのある一人

ひとりが、元々違いがあるのですから、それを皆、その違いを認め合って、互いに助け合って生きていくってことを保育の理念にしています。

〇〇市(筆者注 Bこども園が所在する市)の幼稚園しか知りませんが、キリスト教の園は、共に生きるということが保育の理念になっていると思います。言い方はいろいろあるかもしれませんが、キリスト教の保育理念だと思います、それが。

だから、障害があるからとか見た目が違うからとか、そういうことでお断りするということはないです。ただ、私たちが、やはり、いっぱいいっぱいになってしまって、人手もないのに、責任も持てないのに受け入れるということはどうなのだろうかと考えることはあります。でも、基本的には、ここに入れたいと言われたらお断りしないで、その中で私たちはどうやってその子と向き合っていくかというのを、皆で考えていくようにはしています。

筆者：障害があるから受け入れようとか、そういうことではないということなのですね。

B氏：そうではないですよ。特に障害がある子が来たから受け入れますっていうのではなくて。でも他の、どうしても心情的に、他のところも全部駄目だったのだと言って来られる方とかが結構いるので。

それで、その子どもが「Bこども園に入ったときには、他の園とは違って、すぐみんな受け入れてくれるし、この子もこんなにすんなり入ったことはないです」って。特別なことをしているわけではないけれども、入りやすい雰囲気なのかもしれないです。その子が気に入ってくれたという話を聞くと、いや無理かもなあと思いながら、「どうだい」って先生たちに相談して。

子ども一人ひとりが、神により命を与えられたかけがえのない存在、人という尊い存在であり、一人ひとりに違いがあることを前提として保育を行うこと、そして、時に困難が予想されたとしても、保育者同士の対話を通して、多様な子どもたちがお互いを尊びながら共に在ることを、園として目指していることが、B氏の語りからは窺える。

人を尊い存在として捉えるということに関連して、A氏は以下のように語っている。

3. 「人は造られたもの（被造物）である」ということ

A 幼稚園には「自ら考え、自ら決め、進んで行う子どもに」という教育目標がある。この目標は、A氏が園長就任後に立てた目標であるが、以下は、そのような目標を立てた理由に関してのA氏の語りである。

筆者：僕も子どもを預けていたのですが、子どもの声を大事にする、子どもの考えを拾い上げて、それをどう広げていくかということ、を、すごく大切にされている幼稚園だと思っていて、先生のお話を聞いていて、やはり、そういうこと（筆者注 教育目標のこと）がベースにあって、今の幼稚園になったのかなと思ったのですが、そういうことが大事だと思うようになったきっかけというのは。

A 氏：そこは信仰からきていると思います。どういう信仰かという、私の根本的な考え方は、人は造られたものだっていう考え方ですね。

（中略）

それが1つの奇跡ですね。ここに自分が、こういう人間が1人いるってことって奇跡じゃないですか。例えば、先生もそうだし、私もそうだし、父親がいて、母親がいる。父親がいて母親がいる場合に、その父親と母親が、たまたまそこでひと組になったから私という命が与えられるわけで、これをずっとさかの

ぼっていったら、もう奇跡が奇跡を生んで、そして、今、私がここにいるってことは、もうその奇跡の集大成の中に、私のこの命が今あるという、そういうふうに思うのですよ。で、そういうふうに考えた時に、一人一人の命ってどれだけ尊いかっていう。もう、地球の重さと比べものにならないくらい重いんじゃないかっていう、そういう、私は根本的な考えをもっているんですね。

そうしたら、やはり一人ひとりを、存在を大事にしなきゃならないし、一人ひとりの人権をちゃんときちんと認めてあげなきゃいけないっていう、それが根本にありますね。そこから、一人ひとりの子どもを大事にしていかなきゃいけない。一人ひとりのまず主張を受け入れていかなきゃならない。2歳になって自我に目覚めた時に、子どもたちが自己主張をする、その自己主張をまず受けとめてあげることですよね。そこから幼児教育は始めていかないと。

最初から、そういうわがママを言っちゃ駄目ですよ、そんな自分勝手は駄目ですよっていうことで抑える教育じゃなくて、まず、その自己主張を全面的に受けとめる。とにかく、わがママで当たり前だから、そのわがママを全て受け入れるということ。そこから始めていきましょうというのが私の考え方ですよ。

人は神により造られたもの（被造物）であり、今ここに在ること自体が奇跡である、そのようなかけがえのない存在である子ども一人ひとりを尊ぶ姿勢をもち、その声を受けとめることから保育は始まるのではないかとA氏は述べている。このことについて、A氏は加えて、言葉だけではなく、行動としても表れる子どもの主張¹²を「全面的に受けとめる」ことを、保育者の具体的なかわりとして挙げている。子どもの育ちに何を願うか、という保育者の価値判断以前に、子どもとかかわる保育者自身の姿勢をまず問うているのであ

る。

4. 子どもを「受けとめる」ということ

上述した、A氏の子どもを全面的に「受けとめる」という姿勢に対して、B氏は以下のように語っている。

筆者: その方^{注13}が仰っていたのは、生まれてくることが自体がもう奇跡だから、まずは、もう徹底的にその子を受けとめることから始めるのですということを仰っていて、あれしなさい、これしなさいではなくて、まずは、その子が何をしたいのかっていう声をしっかり聴き、受けとめることから始めていますということを仰っていました。

B氏: そうですね。前にいた子は、玄関までは来れるのだけれど、玄関から一歩入れないとか、それが何ヶ月経ってもそうで、一度は入るのだけれども、でも、頑張って入っても、また次の日から来れないとか。そういうふうになったときに、玄関まで来てくれたのだったら、玄関でいいよって。何をしたいかなっていうのをちょっと考えて、これだったらできるかもね、みたいなことを、皆で玄関でして待っていて。子どもたちが。その子が来たら「じゃあ、一緒にやってみる？」みたいな。玄関ですっと、そのクラスが過ごしていたことがあります。

(中略)

自分の居場所として、ここに安心していることができるようにするというのが、一番最初にすることですね。早くそういうふうになるといいなあとって願いながら、祈りながら、子どもには接しています。

(中略)

筆者: Bこども園さんの障害児保育で重視しておることとか、大切にされていることがあれば、教えていただきたいのですが。

B氏: どうだろう。どの子どもですけれども、その子の気持ちに沿っていくとか、向き合ってあげるとか。やっぱり受けとめ。まずは受けとめということですね。

子どもと教師のその関係を見て、他の子どもたちはそれをまねするようになっていくので、そこは間違った姿勢を見せないようには気を付けていると思います。

B氏からは、子どもの姿を否定することなく、保育者が受けとめ、そして他の子どもたちが受けとめる空気を作りながら、共に生きていくことを願い、追求すること、そして、子どもの思いに沿っていくことを通して、安心して過ごせる居場所を作っていくこと、「受けとめる」ということについての具体が語られた。

IV. 総合考察

A氏、B氏へのインタビュー結果から示唆されたことは、障害のある子どもだけを特別な存在として捉えるのではなく、障害の有無にかかわらず、一人ひとりの子どもの存在を人として尊び、共に生活していくことを希求する保育者としての姿勢であった。このことは、「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人間の多様な在り方を相互に認め合える」共生社会(文部科学省, 2012)の担い手を育むための保育者の姿勢を省察する上で、重要な示唆を与えていると思われる。

南沢(1986)は、キリスト教保育における重要な指針の一つとして「障害児も健常児も神の前にあって、人間として共に生きる保育に立つ」ということを挙げている。原(2018)は、障害のある子どもの保育について「園には、障がいや種々のハンディを負った子どもも来ます。イエスさまがそうであったように、当たり前を受け入れ、ごく自然に共に生きたいと私は願うものであります。そういう子を受け入れる場合、障がいの内容や程度、生活の展開の方法などについて一応の知識はもちますが、そのことをマイナス点として、“補っ

てゆくとか克服させようとかという視点”ではなく、(治療教育の必要は認めています。しかしそうした方向からでなく) その子のすべて、丸抱えに人間として受けとめ、さりげなく共に生きてゆきたいと考えます」と述べている。

小見(2021)は、「子どもの主体性、神から与えられた尊厳を重視した子ども本位の『ケアとしての保育』、すなわち、ありのままの子どもの全体性を受けとめ育む保育は、キリスト教保育の目的を子ども自身のエンパワメントへと向かわせるものといえるのではないだろうか」と論じている。子どもが安心してそこに在ることができるよう、そして、その子が自分を発揮できるよう、その子の良さが見えるよう、保育者は子どもを受け止め、時に見守り、待ち続ける。子どものもつ特性や属性によって、子どもを理解する以前に、人という尊い存在として、共感と畏敬(佐伯, 2013)の念を持ってかかわろうとすること、このことは、キリスト教保育の実践園をはじめ、インクルーシブな保育を追求し、実践している園における、子ども理解の大きな特徴なのではないかと考える。

本研究では、キリスト教保育に長年携わってきた実践者へのインタビューを通して、多様な子どもがそこに在ることを前提としたインクルーシブな保育を実現するための子ども理解について考察した。このような理念が、園での保育実践にどのように浸透し、具体として表れているのか。今後は、インクルーシブな保育を実現するための実践の具体像や実践知を、フィールドワークを通して明らかにしていくことで、障害の有無にかかわらず、全ての子どもが、その子らしく、自己を発揮して過ごすことができる保育を実現するための方法について考察することを課題としたい。

注

1. 「保育」という言葉は、我が国で最初の幼稚園である、東京女子師範学校附属幼稚園の創設に際して、小学校教育とは異なる幼稚園教育の独自性を示すために考案されたことが起源である(湯川, 2016)。現在は、保育所、認定こども園、幼稚園等、乳幼児を対象とし

た就学前保育施設での実践を意味する用語として、共通に使用されている。

2. 保育所は保育士、幼稚園は幼稚園教諭、幼保連携型認定こども園は保育教諭など、国家資格や免許状に対応した職名があるが、本稿では、これら保育施設での実践者を総称する言葉として「保育者」を用いた。
3. 若月(2022)は、「インクルーシブな保育実践とは、多様な子どもたちを園として受け入れ、当事者である障がいのある子どもと、他の子どもとの関係を深め、どの子どもに対しても一人の大切な子どもとして育て、『いろいろな人がいても実践できる保育』『どの子どもにとっても楽しい園生活』『保護者にとっても多様な子どもがいることで保育が楽しくなる実践』を目指すことが必要なのです」と述べている。若月(2022)を踏まえて、本論文では、インクルーシブな保育とは「何か特別な技法や教材を用いた保育を行うことではなく、多様な子どもがそこに在ることを前提に、一人ひとりが、その子らしさを発揮して、乳幼児期にふさわしい安心した生活を創り出すことを目指す保育」として論を進める。
4. 例えば、石井亮一、賀川豊彦、川田貞治郎、糸賀一雄、津守真などが挙げられる。
5. 「午後の園児には目の病気を持っている子が多かったが、園では常に施設・設備の消毒が行なわれ、医者の治療が継続的に行なわれた。こうして子ども達はみちがえるほどに変化し、保育者の行き届いた日常の生活指導が親にも子にも良い影響を与えた」(小林, 1986)
6. 幼稚園については「心身障害児幼稚園助成事業補助金交付要綱」(公立幼稚園対象)と「私立幼稚園特殊教育費国库補助金制度」が、保育所については「障害児保育事業実施要項」が、共に1974(昭和49)年に策定された。
7. 文部科学省(2012)は「共生社会」について以下のように示している。『共生社会』とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指す

ことは、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である」

8. A氏は男性、B氏は女性である。
9. インタビューの事後に、筆者の考察に対して、A氏に確認を求めた際に「上から目線の同情(pity)ではなく、横並びになって同じ方を向くこと(empathy)である」と補足をいただいた。
10. 筆者によるA氏へのインタビューのことである。
11. 「人間の尊さを共に生きる」について、Bこども園の要覧では「私たち1人1人は神によって命を与えられ、かけがえのない存在として祝福されています。ここに、命の尊さがあります。『できる』『できない』という価値観や理想の子どもの像を育てるのではなく、違いのあるもの同士が、理解しあい認め合って共に生きることを保育の目的としています」と説明されている。
12. インタビューの事後に、筆者の考察に対して、A氏に確認を求めた際に「さらに付け加えれば、『心のシグナル』(言葉や行動にさえ表すことができない子どもの内面)も含める」と補足を受けた。
13. A氏のことである。

文 献

- 浅見均(2004) 幼児と宗教教育. 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報, 12, 147-165.
- 原和夫(2018) 見えないものを見る. キリスト教保育連盟編集委員会(監修) ともに育つ保育入門. キリスト教保育連盟, pp. 59-72.
- キリスト教保育連盟(2010) 新キリスト教保育指針. キリスト教保育連盟.
- 小林恵子(1986a) キリスト教保育の創始. 第1節 草創期の幼稚園. キリスト教保育連盟百年史編纂委員会(編) 日本キリスト教保育百年史. キリスト教保育連盟, pp. 39-51.
- 小林恵子(1986b) キリスト教保育の創始. 第5節 保育所と無料幼稚園. キリスト教保育連盟百年史編纂委員会(編) 日本キリスト教保育百年史. キリスト教保育連盟, pp. 91-103.
- 南沢志げ(1986) キリスト教主義保育の現況 第1節 保育内容の研究. キリスト教保育連盟百年史編纂委員会(編)

日本キリスト教保育百年史. キリスト教保育連盟, pp. 406-415.

- 南沢志げ(1983) 園児および卒園児. キリスト教保育研究委員会(編) キリスト教保育の現実と展望: 実態調査に基づく. キリスト教保育連盟, pp. 22-29.
- 文部科学省(2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告). https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm (2022年9月1日14時11分閲覧)
- 小見のぞみ(2021) キリスト教保育とは何か: その子ども観と保育理論. 聖和短期大学紀要, 7, 9-19.
- 佐伯胖(2013) 子どもを「人間としてみる」ということーケアリングの3次元モデル. 子どもと保育総合研究所(編) 佐伯胖・大豆生田啓友・渡辺英則・三谷大紀・高嶋景子・汐見稔幸(著) 子どもを「人間としてみる」ということー子どもとともにある保育の原点ー. ミネルヴァ書房, pp. 81-126.
- 柴崎正行(1997) 統合保育の歴史. 保健の科学, 39(10), 673-678.
- 若月芳浩(2022) 「インクルーシブな保育」導入のススメ: 多様な子どもたちを受け入れるための心得. 中央法規.
- 湯川嘉津美(2016) 保育という語の成立と展開. 日本保育学会(編) 保育学講座1 保育学とは 問いと成り立ち. 東京大学出版会, 41-67.

付 記

A氏へのインタビュー結果については、日本乳幼児教育学会第30回大会で発表した。本論文は、上記の学会発表の内容に、B氏へのインタビュー結果を加え、全体に加筆、修正を行ったものである。

謝 辞

インタビューを通して、キリスト教保育に関する貴重な教授をいただきました、A幼稚園理事長先生、Bこども園園長先生に心より御礼申し上げます。また、本研究の実施、論文の作成にあたり、JSPS 科研費18K18615(研究代表者: 北海道大学川田学)、及びJSPS 科研費21H00846(研究代表

者：東洋英和女学院大学 塩崎美穂）の助成を受け
ました。

